インドネシア旅日記

長谷川　孝

６月某日　演習林事務官の平野氏から「インドネシアに行かないか」と誘われた。それを特に断る理由もなく「ああ、いいよ」ということでインドネシアに行くことが決定した。インドネシア行きのメンバーは、前出の平野氏、井上氏（演習林事務官）、境氏（和歌山演習林業務主任）、私、山崎氏（林学の院生）、そして神崎康一教授（演習林長）である。このインドネシア行きの計画が持ち上がったのは、神崎林長が、インドネシアに行くということで、それに便乗させてもらうことにしたのである。

さて、インドネシアといえば海外で、海外といえば日本から出国するということである。境氏と平野氏は新婚旅行という名のもとに海外旅行は経験済みであったが、私と井上氏は初体験である。海外旅行に行くにはまずパスポートを取得しなければならない。旅券事務所に申請書をもらいに行き、必要書類として戸籍抄本１通（私は本籍が北海道であるので北海道から取り寄せた）、住民票１通、証明写真２枚、自分の住所、氏名を書き込んだ官製はがき１枚を揃え、再び旅券事務所に行って申請書を提出した。それから一週間が経って受け取りの日時を知らせるはがきが家に届いた。そのはがきと受領証、登録手数料として一万円の証紙を買って、三度旅券事務所に行きめでたくパスポートを手にした。これで私にとって初めての海外旅行が始まるのである。

７月１３日　京都は祇園祭の時節である。祇園祭が終わると梅雨も明け本格的な夏の到来である。

さて、明日はいよいよインドネシアに出発する日である。井上氏が私の下宿に泊まりにきた。彼は朝が弱いため、遅刻しては大変なのできたのである。私の下宿は、風の通りが悪く、その上ここ２、３日の蒸し暑さと、修学旅行の前の晩に眠れなかったような興奮でなかなか寝付けずにいたら、翌朝１０分程寝過ごした。

７月１４日　京都駅で待ち合わせしていた平野氏と新大阪駅へ向かった。新大阪駅には境氏がすでに来て待っていた。神崎林長が暫くしてやって来た。新大阪駅から空港行きのバスに乗って大阪・伊丹空港に着いた。日本出国まで後１時間余りである。

国際線のロビーに入り搭乗手続きをして、次に出国手続きをした。スムーズに事は進行した。搭乗時間までまだ時間があったので出発ロビーで暫く待っている間、最近、飛行機事故が多いので不安な気持ちで落ち着かなかった。まだここは日本である。

搭乗時間になったので機内に乗り込んだ。離陸前に国内線でもやっている救命具の取り扱いや、非常口、酸素マスクなどひととおりの説明が終わり飛行機は予定の位置に着いた。ポーンという音の後飛行機は加速していった。いざ離陸である。みるみるうちに高度を上げ高度１万ｍのあたりで水平飛行に入った。日本は見えなくなった。この飛行機は、キャセイ・パシフィック航空香港行きで、香港までの飛行時間は約３時間半である。香港と日本の時差は１時間で、日本で１０時ならば香港では９時である。

機内には、２人の日本人スチュワーデスが添乗していたのでくつろぐことができた。さしずめ宴会騒ぎである。そうこうしているうちに無事香港に着陸した。香港の空港は広く、飛行機を降

りてから空港の中に入るまでの送迎バスは運転席が前後に付いている近代的な車であった。空港の中は沢山の人と、沢山の免税店で賑わっていた。

インドネシア行きの搭乗時間になり、送迎バスに乗って飛行機まで向かった。今度もキャセイ・パシフィック航空機であった。香港まで無事に着いたのとアルコールが入っていたせいで気分は落ち着いていた。香港からインドネシアまでの飛行時間は約４時間半である。香港とインドネシアの時差は１時間で、日本とは２時間の時差である。この飛行機は、全席禁煙で少々フラストレーションが溜まったが、またも宴会騒ぎをして気分を紛らせていた。

予定時刻よりやや遅れ、現地時間で１９時頃インドネシアのジャカルタにあるスカルノ・ハッタ空港に降り立った。不安に思っていた入国手続きは以外と簡単に終った。荷物を受け取って到着ロビーに出るとセチャ氏（京都大学の林学で学んでいる）とボゴール農業大学の方々が迎えに来ていた。空港の外に出て車を待った。梅雨時で湿度が高く蒸し暑い京都に比べると、インドネシアは、今は乾期で夜という事もあり涼しかった。雰囲気は日本と変わらずタクシーの往来が激しかった。タクシーを見ると日本でも有名なフォード車（マツダと提携している）であった。

空港から大学の車で本日の宿泊予定地であるボゴールまで向かった。車の通行は日本と同じ右側である。約１時間でボゴールに着いた。ホテルにチェックインして、部屋割りをジャンケンで決めた。今日は平野氏と同室になった。夕食は大学の方々と共にホテルの近くのビアガーデンのような所で初めてのインドネシア料理を味わった。インドネシアでは米を主食にしている。ご飯（ナシ）の味は話題になったタイ米に似ている。焼き魚と唐揚げした魚（イカン・ゴレン：ゴレンとは炒めるとか焼くときに使う）の姿は日本では見たことのない形で、身は白身、味は淡泊でカレイに似ている。串焼き鳥（サテー）は、香辛料は利いているが日本人の口にもよく合うと思った。野菜スープ（ソト・アヤム）は中に鶏肉とジャガイモ、キヌサヤと他にマツの実のようなものが入っている。スープの量より具が多く、スープというより煮付けのようなかんじである。味は、コンソメスープをベースに具の味が複雑に入り交じっていてあまりおいしくなかった。ビール（Bir Anker）はまずいと思っていたが、冷えていたのでおいしかった。インドネシアの人口の90％がイスラム教徒である。イスラム教は、アルコールがタブーとされていて、豚肉は食べない。インドネシアではトンカツは食べられないということである。

７月１５日　今日はボゴール農業大学の演習林に行く予定である。昨日の飛行機の旅で多少疲れていた。ホテルの朝食はバイキング形式で、私は焼き飯（ナシ・ゴレン）を食べた。食後にコーヒーを飲んだがまずかった。

昨日と同じ車に乗り大学へと向かった。予定時間より早く着いたので大学の構内を車で廻った。構内は京都大学より広く新たに建築している建物もあった。インドネシアで林学科のある大学はこのボゴールとジョグジャカルタのガジャマダ大学の２つである。他にカリマンタン、スラウエシ、マルク、西イリアンの大学の農学科に林学の講座が設けられている。セチャ氏に通訳をしてもらって大学の先生方の話を聞いた。内容は半分も理解できなかったが、その中で記憶しているのは、昔、日本の企業が入って大量に木を伐採したのはスマトラの辺りで、このボゴールでは伐採はされていないと言うことであった。当時大量に伐採された理由は外貨を獲得するための手段であった。しかし、最近は自然保護運動の活動もあり伐採の方は抑えられていて、造林の研究を主として行っているそうだ。大学の中にある温室を見学した。日本でも聞いたことのあるユーカリやアカシアなどポット苗で作られていた。

大学から演習林に行くまで２時間程かかった。最初に車が止まって降りた所にはメルクシマツ（マツ科）があった。マツは日本のマツと同じでマツであることがすぐ解った。他に針葉樹でア

ガチス（ナンヨウスギ科）があった。これは、葉を見ると広葉樹に見えるが樹皮はモミに似ている。アガチスの造林地が全体的に多く見られた。広葉樹はマホガニー（センダン科）、アカシア、シタン（マメ科）などがあった。この辺りではチーク（クマツズラ科）は少ないと言うことであった。２時間程演習林を見学して、今日宿泊のジャカルタのホテルへ向かった。ホテルに着いて部屋割りジャンケンをした。今日の同室は境氏である。ホテルの隣にはディスコがあった。日本円をインドネシア通貨に替えた。この時の相場は1円が20ルピアであった。

７月１６日　今日は自由行動の日である。境氏、井上氏、山崎氏、セチャ氏、私の５人はジャカルタの中心部を午前中見学することにした。最初に行ったのは独立記念塔である。この塔の高さは137mある。先端部分には、インドネシア独立のシンボルとして炎の彫刻がある。展望台は115mの高さにあり市内が一望できる。次にインドネシア最大の歴史民族資料博物館である国立中央博物館に行った。ここにはジャワ原人（ピテカントロプス）の頭蓋骨（複製）が展示されている。ジャカルタの中心部から一路ボゴールに向かいボゴール植物園を見学した。この植物園の面積は110haで、約15,000種の植物が世界各地から集められている。この後サファリパークを見学しジャカルタに戻った。夜は、神崎林長と平野氏が今日一緒に行動をした京都大学のOBで住友林業からインドネシアに来ている泉谷氏と夕食をとった。夕食後、日本人がビジネスに来きたときに寄るLittle Tokyoのような街に行った。そこには、店の中が仕切られていて部屋になっているカラオケボックス風の店があるというので唄いに行ったのである。店の中に入るとお客一人一人にホステスが着いたのでスナックなのであろう。カラオケのディスクは日本語詞であった。

７月１７日　今日はジャカルタから東に約500km行ったところにある、ジョグジャカルタへの移動日である。スカルノ・ハッタ空港からジョグジャカルタのＫ．Ｃ．アディスチプト空港まで約１時間で着いた。空港にはガジャマダ大学の方々が迎えに来ていた。先にホテルに行って荷物を預け、世界最大、最古の仏教遺跡であるボロブドゥール寺院の観光に出かけた。この遺跡は、観光のハイライトになっており大勢の人が見学に来る。この日も我々以外の日本人が来ていた。日本人向けの現地のガイドに案内してもらった。遺跡は9世紀にできた。火山の噴火かなにかにより埋もれていたのを、19世紀初期に発見され、20年をかけて発掘された。風雨と太陽熱による自然風化が進み、一時は崩壊の危機にあった。1973年からユネスコの協力と各国の援助により修復が始まり1983年に完了した。全体は9層から成っており、各層間は回廊がぐるりと取り巻いている。壁面は432の仏龕に据えられた石仏があり、第2層壁面からは仏典の全てを表したレリーフ（1460面）で埋められている。レリーフの作品の中で第2層には"釈迦生誕図"が描かれている。基壇部分は"欲望の界"で、この界は人間が持っている煩悩の全てがある世界である。第1回廊から第4回廊までは"有形の界"で、この界は無欲の世界である。残りの上層を"無形の界"といい、この界は悟りの世界である。上層の3層は円壇になっており、下から32、24、16個の釣鐘形のストゥーパ（仏舎利塔）が規則的に並び、そして最上段には直径16mの大ストゥーパが乗っている。この遺跡が建てられた頃は仏教文化が栄え、後にヒンズー教文化が栄え、そしてイスラム教に支配されたのである。

７月１８日　ガジャマダ大学に行き演習林の研究内容や実情などの話を聞いた。この大学は東南アジアでは最大で、ボゴール農業大学よりも大きく、建物は近代的であった。

大学から演習林まで２時間程かかった。この辺りは近くに"ジャワ富士"と呼ばれている3,000m級の山があり、今でも火口からは噴煙を上げ、時には溶岩が麓まで流れ出ることもあるらしい。火山灰の影響で土壌は肥沃になっている。そのため木の生長は良さそうである。演習林の森林は

広葉樹が目立っていた。ジャワ島では、西部よりも東部の方がチークの造林地が多い。他には、ラワン材で知られるメランティ（フタバガキ科）などがあり、なかにはネムノキ（マメ科）に似た木もあった。研究の内容は忘れたが、アカシアの研究林があり、数種類が植えられていた。この辺りの農家の人が苗畑の管理をしながら、同じ畑の中で落花生を作っていた。草が生えてきて除草しなければならない手間を考えると、空いているところで農産物を作るということは正に一石二鳥である。しかし、落花生を作っている影響からか、苗木は、丈は高かったが幹周りは細かった。演習林の見学を終えて、明日はカリマンタンに渡らなければならないので、今日のうちにセマランまで行き宿泊した。ホテルまで行く車の中で疲れが溜まってきたのか熟睡した。

７月１９日　セマランからカリマンタンのバリックパパンに渡る。飛行機で２時間程である。途中、日付変更線を越え１時間進んだ。空港に着くとムラワルマン大学のスラメット先生が迎えに来ていた。この先生は、以前に神崎林長が鳥取大学におられたときに一緒であったそうだ。空港から大学のあるサマリンダ市へ大学のバスで向かった。行く途中で山から煙が出ているのが見えた。これは、1982～1983年にかけて約380万haの森林火災が起きたそうだ。原因は旱魃の影響で乾燥していたときに焼畑をし、飛び火して類焼したらしい。伐採跡地には、残された末木枝条があり火災の被害を加速増大させた。雨期に入り大雨が降ってようやく鎮火したが、地下には泥炭層があり、その泥炭が今でもくすぶって煙が出ているのだそうだ。地中が焼けたため土に養分が無くなり木を植えてもすぐに枯れてしまうらしい。自然に更新されるのを見守っているとのことである。

ムラワルマン大学は日本の国際協力事業団（ＪＩＣＡ）と熱帯降雨林研究を共同で行っている。大学の中には事業団の研修施設が建てられていて、ここに２日間宿泊した。今までのホテルはお湯の出る風呂であったが、ここは水しか出なく、シャワーしかなかった。インドネシア式に近い作りなのである。日中の汗を流すため勇気を出して入った。貴重な体験をした思いである。

夕食は、スラメット先生の家でインドネシアの家庭料理を味わった。バスの中でも食べたインドネシア風ちまきがあり、これはとても美味であった。冷蔵庫が一般家庭では普及していないらしく、ビールが冷えていなかった。

７月２０日　サマリンダ市はマハカム河という大きな河の河口にある。マハカム河の沿岸には製材工場や合板工場が並んでいる。1970年代には、日本からの木材運搬船が港に停泊していたが、原木の全面輸出禁止で、今ではジャワ島向けの木材船がたまに滞船している程度である。

事業団の研究林を見学に行った。事務所には、日本から２名の留学生が来ていた。一人は東大の女学生で、ここに来てから３カ月だそうだ。来たときには雨期で、山に入ってヒルに噛まれたそうだ。事業団の研究林にはモクレン科の造林地があった。天然林では、メランティ、カプール、クルインなどのフタバガキ科の木が自生していた。

神崎林長、山崎氏、セチャ氏とはこの日で別れ、ジャカルタに一泊してインドネシアを後にしたのである。

旅行後記　インドネシアでは宗教的なことから左手は不浄とされていて、左手では人を指したり、子供の頭を触ったりしない。トイレは紙を使わず、便器の脇に置いてある水瓶の上に浮いているお椀で、右手で水を汲み、左手で洗い流すのである。

また食べてみたいと思う食べ物は、カリマンタンで食べたインドネシア風ちまきである。心残りなのは、インドネシアに行ったら絶対食べたいと思ったカレーである。カレーは飛行機の中で

食べたが、店に入って食べなかった。それが心残りである。それから、インドネシアの料理でおいしかったのは、カリマンタンの食堂で魚の煮汁をご飯にかけて食べた料理である。

インドネシアに行って良かったと思ったのは、日本以外の海外の国に行けたことである。ただ漠然とインドネシアのことを聞いているよりも、やはり実際見に出かけるというのは、そこの文化や人を肌に直接感じることができる。この体験は後々貴重な体験として行けるであろう。悪かったところはインドネシアの予備知識を持たずに出かけたことである。初めて海外に行くことばかりを考え、少し浮かれすぎていた面があった。知識を持たずに人の話を聞いても心に残らないし、人の話を批判することもできない。今後海外に行くようなことがあれば一般知識を勉強した上で行きたいと思う。今回年休を取って旅行に行かしてくれることを許可していただいた利用掛の木村さんと湯浅さんに感謝いたします。

ボロブドゥール寺院にて

ムラワルマン大学にて